

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370500344		
法人名	医療法人社団 きのこ会		
事業所名	グループホーム ローゴム		
所在地	岡山県笠岡市東大戸2712-3		
自己評価作成日	平成31年3月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kani=true&amp;JigvogyoCd=3370500344-00&amp;PrefCd=33&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kani=true&amp;JigvogyoCd=3370500344-00&amp;PrefCd=33&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館
訪問調査日	平成31年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

平成30年3月より、同建物の2階の場所に新たに1ユニット(9名)増床し、2ユニットとなりました。1階は今まで通りピック病専門として、2階は地域密着型のグループホームとなっています。今までグループホームの経験のない職員で構成されているため、初めは職員たちも不安な気持ちがあり戸惑いながらの船出でしたが、入居者が一人二人と増えていく中で自信をつけ、のびのびと入居者の皆さんに関わらせていただいています。また、固定概念を持たない職員同士が、自由な発想で意見を出し合い、入居者の方の生活をより充実したものになるよう日々考えて実行しています。今後、この場所で四季を感じながら穏やかに生活していただけるよう、買い物やドライブ、外食などの外出支援やお花見などの季節行事の企画に力を入れていき、新しいローゴムを作り上げていきたいと思っています。

“ピック病の人でも、ゆったりした生活が送れるように”と院長は建物をスウェーデンから直輸入して、平成13年にグループホームローゴムが誕生した。当時は、この病気になった人を受け入れる医療機関や施設もなく唯一のこエスポアール病院に全国から頼って来院していた。この患者の中から9人と職員も病院の中で選抜して、薬物療法に頼らず、共に暮らせるにはどうしたら良いか、大きな課題を克服する実験棟ローゴムが17年間歩んできた。ピック病の人が穏やかに生活出来るケアのノウハウを全国的に生かしたマネージメントで営むグループホームが完成したことは言うまでもない。ピック病の人を受け入れる医療機関も全国的に広がったので、平成31年度から地域密着型グループホームに生まれ変わるようになった。階上の施設を利用して2ユニットのローゴムが平成30年度に誕生した。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人のあるがままを受け入れ、共感することを基本として、ピック病特有の「我が道を行く」といった自由奔放な行動や言動を、スタッフ一人一人が理解し、「つき過ぎず、離れ過ぎず」という理念を持って接している。	従来の理念「つき過ぎず、離れ過ぎず」を継承していくが、「居場所づくり、環境づくり」をも念頭に置き、利用者に自分の家と思ってもらえるよう心掛けていきたいと考えている。職員は前向きな意欲を持っており、利用者一人ひとりに対して何をすれば良いのか具体的に考えながら高い意識を持っている集団なので、グループホームのモデルとなって欲しいと願っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	立地の関係上、地域の中に溶け込んでいるとは言いがたいが、それでも入居者と戸外へ散歩に出かけた時に、地域の方や近隣施設の利用者さんと自然な挨拶を交わすことを地域交流のひとつとして行っている。ここ数年で定着してきたと思われる納涼祭も、地域交流の一つと感じている。	認知症カフェや地域サロンにも職員と一緒に参加している。これからは元気な人が多くなると思うので、散歩や施設間の人々との交流を活発にしてくれるだろう。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ピック病という病気の理解と、症状に対する介護方法を、見学や運営推進会議の勉強会などを通じて提供させていただいている。 また、その際実践していることを報告させていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催している運営推進会議は、近隣の3つのグループホームと合同で行い、有識者の方および他施設の職員と意見交換をすることで、活動意欲を高めるよう努力している。また、それぞれのホームの特徴が垣間見られるので、合同での会議の開催に意義を感じている。	施設内の4つのグループホーム合同で笠岡市や地域の人も参加して2ヶ月毎に開催しているが、新しく地域密着型ホームに生まれ変わったので、他のホームと共通点も増えるだろうし、その中からこれまでに培ってきたマネジメントのノウハウも全体の話題になっていくと期待したい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	笠岡市には、当事業所の運営の趣旨を理解していただいております。信頼関係もできてきていると感じています。また、運営推進会議などを利用して情報交換を密に行い、わからないことや質問・疑問があれば、いつでも連絡が取れる関係を築いている。	2つのユニットとなり、地域密着型のホームになったことから笠岡市も期待が大きくなったと思う。あらゆる病気から認知症になった人が集まるホームになると思うので、ホームの運営やケアマネジメント等を指導する立場から、このホームの生み出す効果は大きいと思う。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束を行うことでは何も生まれないことを職員一人一人が身をもって体験し、理解している。どのような行為が拘束にあたるのかを都度考え、意見交換を行いながら身体拘束をしないケアを実践している。不安感から外へ出ていこうとされることもあるが、関わりを重視して解決できる方法を常に考えている。	このホームの自己評価で、身体拘束や虐待をしない実践について、実践している記述の内容は他のホームにはない内容だと感服した。その中で「職員一人ひとりが常に意識してケアを行っている」の文章に特別の思いを持った。職員が意識を持って利用者に接している術を他のホームの手本になって欲しいと願う。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	昨今特にメディアに取り上げられている高齢者虐待については、運営推進会議の場でも勉強会を開いたり、職員間で話題にあげたりすることで、常に意識してケアを行っている。また、面会や見学など来所しやすい雰囲気を作ることで、外部の目を入れるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	関連する書物、資料を準備し、いつでも閲覧可能なように整えている。認知症の方が利用されているグループホームの職員として、成年後見制度は身近な法制度として理解していく必要があると感じている。	/		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	必要な書類を提示、配布し説明を行っている。利用途中に行われる介護報酬の改定や加算の増減などの利用料に関することは、文書だけでの同意でなく、口頭での説明を行って納得していただいている。また、不明な点や質問をいつでも受け付けられる環境			/
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者、家族等の意見や要望の大切さを理解し、家族の面会時には積極的にコンタクトを取り、話がしやすいような雰囲気を整えている。その際、本人さんの現状を包み隠さず報告しており、内容をすぐ記録に残して、職員全員が家族の思いを周知して、サービスにつなげるよう努力している。	平成30年度でピック病特区としてのホームは終了する。長くこのホームで過ごした女性3人組の人は仲良くソファに座って静かに過ごしている。1人は間違い探しやジグソーパズルで今迄通り過ごしていた。アルツハイマー病の女性もゆったりと1人でテーブルに座っていた	平成30年度に新しくホームを開設し、男性3人、女性6人の利用者が入所して、皆さん元気で楽しそうに話したり、ゲームを全員で楽しんでいった。アルツハイマー病等の症状のまだ軽い人の集団なので、皆で揃って生活が楽しめるグループホーム初期の頃を思い出させてくれた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	勤務時間の合間に感想や提案等、意見交換する機会を作り、運営に取り入れている。また、連絡ノートや介護記録などを通じて、管理者がスタッフの思いをくみ取り、個別に意見を聴く機会を設けている。	管理者は両ユニットを率いて引き継ぐ。職員は正職6名と調理専門のパート専従。従来の職員でそれぞれの利用者の状況をしっかりと見届け、職員としての心得を持ちつつケアに努めていた。それぞれの利用者に対する接し方もこれまでと変わらない。	男性のリーダーと職員が6名。病院の病棟で勤めていた中から抜擢された6人がグループホームの職員としては初めての経験で戸惑いを持ったであろうが、1ユニットのケアの考え方、取り組み方を参考にし今ではチームワーク良く従事していた。調理専門のパートが食事を作る。	/
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が、法人管理職との情報交換を都度行っており、職員の意見や要望を伝える機会を設けている。また、自ら考えて行動できる環境を整え、いつでも相談できるような信頼関係を築き、働き甲斐のある職場作りに努めている。	/		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人による社内研修、グループホーム独自の勉強会および社外研修に参加し、ケアの向上に努めている。また母体である病院職員とのコミュニケーションをとることによって、実践的な知識の習得(特に医療面)に努めている。			/

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	国内・外を問わず活躍する代表者によって、同業他社の方との交流の機会があり、サービスの質の向上へとつながっている。管理者は、2か月に1回開催されるきのこグループのグループホーム部会に参加し、情報及び意見交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	失語もあり、自ら意思伝達することが難しいので、スタッフが本人さんの思いをくみ取り、「ここに居てもいいんだ」と思っていただけに関わっている。また、環境面では面会の時などに家族の近況が分かる写真などを持って来てもらっている。担当スタッフが決められ、そのスタッフ中心に入居者と一緒になり生活環境を整えたり、不安を解消するケアを展開する。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初から全ての情報を把握するというよりも、入居後の面会や電話などを利用して、徐々に信頼関係を築いていき、何でも話せる環境づくりに取り組んでいる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前に知っている情報だけに頼るのではなく、入居後に家族の方から得られた情報や本人さんの今の状態を都度記録に残して、即座にスタッフ全員で共有できるようにしている。そして、担当スタッフが中心となり、入居者にとってしやすい環境が提供できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	その人らしさを忘れず、常に尊敬の念を持って接している。相手の立場を思いやり、本人さんが「ここに居てもいいんだ」という安心感を持って暮らしていただけるような関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人さんにとって家族はかけがえのない存在である。そのため、面会や電話をしやすい雰囲気を作って、家族の思いも含めた支援を提供している。また、毎月送らせていただいているケアプランや家族通信および面会を通して、本人さんの状況を伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地元から遠く離れて生活している方が多いが、面会しやすい雰囲気を整えたり、外出・外泊できる支援を行うように努めている。外出時には、地元を訪れ馴染みの関係の人に会ったり、話をしたりしている。また、この場所が第二の“ふるさと”として認知していただけるよう努力している。	奈良から来ていた利用者を故郷に帰らせてあげるプロジェクトは昨年計画していたが、今年5月に実現させた。日帰りの旅になったが、本人と家族にとっては一生の思い出になったろうと嬉しく思った。	利用者全員地元の人ばかりであるが、自分の故郷（生まれた所、子供の頃等）への思いはそれぞれに心にかけているであろう。皆でレクリエーションをする時、例えば歌を唄う合間にそれぞれの人の故郷の事を話し合うことも良いと思う。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ピック病の特性として「我、関せず」と他入居者に関心を示されるとい方が少なく、会話が絶えないという雰囲気は見られないが、さりげなく職員がそばに寄り添い、馴染みの人が側にいるという安心感を得られるような関係づくりに努めている。2階では、場面場面でスタッフが仲介して交流ができるよう心掛けている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	協力病院への入院や在宅復帰という形でサービス利用の終了を迎えても、電話などを通じて、その後の経過を把握して、相談援助に努めている。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向をうかがえない方が多い中、担当するスタッフを中心として意見を集め、日々の暮らしの中からその人らしさが一番輝くケアを提供していけるように努めている。	自己評価で記述している「その人らしさが一番輝くケア」をするという職員の利用者一人ひとりへの意識の高さを物語っている。その考えから利用者の意向を作り上げられるのだろう。	1ユニットが長年に亘り実施してきたケアへの考え方を踏襲している。利用者は自分で表現できる人もいると思うが、そんな人でもしっかりコミュニケーションをとってこのホームで輝ける人生を作り上げて欲しい。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族の方の面会時や電話での会話の中で、本人に関する話をうかがい、都度介護記録に残すことで情報を共有している。その情報をもとに、その方の可能性を引き出せるような支援に取り組んでいる。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護記録では、毎日のバイタルやスタッフ自身の意見・感想を記入するようにすることで、スタッフ全員がいつでも意見および情報交換出来るようにしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	1ヶ月毎の独自のケアプランを使用し、より一層今の状態に応じたケアプランを提供している。入居者本人が、本来持っている良いところに常に目を向け、可能性を見いだせるようなケアプランの作成に取り組んでいる。	職員が出勤すると、記録類をしっかりと見つけている。どこのグループホームでも同じことをしているが、真剣さが違う。高い意識を持っているからこそ、情報を読み取れるし、次の職員に伝えられるのだと思う。職員が協力して行うケアマネジメントから利用者は幸せを得ているのだろう。	新しい職員は1ユニットが17年間に築いてきたマネジメントを受け継いでいく。次年度からこのリーダーが管理者としてホーム全体を引っ張っていくと聞いたが、今までの自己評価にある内容を、普通のアلزハイマー病の人であっても意識を持ってマネジメントに当たってもらうことを期待したい。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者一人ひとりの記録に、スタッフの意見、気づきや思いを書くことで情報を共有でき、より良いケアへつながるように取り組んでいる。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	スタッフ全員で協力して、敷地内にある美容院への付き添い、近隣のスーパーへの買い物、行楽地へのドライブ、季節行事の実施等、日常、非日常を問わず、幅広いサービスが提供できるような取り組みを続けている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	2階では、地域サロンに参加したり、社協紹介によるサークルの方の楽器演奏を聴いたりなどの地域資源の活用をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	同一敷地内にある病院より、月に一回の往診および年に2回の健康診断を実施している。また必要な方には、訪問歯科を定期的に利用していただいている。常に必要な医療が受けられるよう情報を共有しており、より入居者の希望や要望に応えられるよう支援している。	丘の上にあるこエスポール病院があって、その地域に介護施設やケアハウス等がある。院長・副院長を始め医師や看護師、介護専門職等認知症について知り尽くした人達の集団であるので、利用者の医療面でのケアは申し分ない。利用者は健康で暮らせるし、家族も安心して任せておける境遇である。身体上の問題があれば、管理者や職員からすぐに家族に連絡してくれる。	在宅から入所してきたのは男性利用者1人。他の8人は殆どこのこエスポール病院や老健から来た人ばかりであり、7人が院長が主治医、従来のかかりつけ医を受診するのは2人との事。定期的な往診もある。他科受診が必要な時は紹介状を書いてもらっている。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の状況を把握し、昼夜問わず母体となっている病院看護師との連携強化を行うことで、より広い視野を持って入居者の生活を支えている。また、医療行為等が必要と判断した場合はすぐ連絡をとり、適切な処置を行えるような支援を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	介護記録に入院中の様子を綴り、現在の様子を把握することに努めている。その後の退院に備え、スムーズにグループホームで暮らせるよう、病院関係者と連絡を密にとるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化によって、医療面のサポートが不可欠になった場合のことを考え、事前に主治医・本人・家族と話し合いを行うことにしている。日常生活の中で、入居者の方の状態を見ながら協力病院と連携を図り、主治医に報告・相談する体制を整えている。	認知症の症状が重度になったり、病気の度合いが悪くなれば、医師の判断で病院の方に移って医療措置をする。法人全体として基本的にホームでの看取りはしないと聞いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時のマニュアルを作成し、いつでも見る事が出来るようにしている。急変時には、同一敷地内にある病院と連携が取れる状況を構築している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急時のマニュアルを作成、年2回のグループ全体の避難訓練の実施と災害に対して対策、訓練に備えている。近隣グループホームと連携を図り、より実践に即した訓練を行っている。	前年度の目標達成計画で災害対策をあげているが、同一敷地内にある病院、介護施設、グループホームが総合して連携し対策を構築している。大地震が発生した時、初期対応はグループホーム独自で即時対応しなければならないので、落下物・転倒物については事前に処置しておく必要がある。	



自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	スタッフ同士の発言、入居者への声かけや対応をプライバシー保護の観点から常に考えられるよう、お互いにチェックできる環境づくりに取り組んでいる。	職員と利用者、利用者同士の間で起きそうなトラブルの場面を想定しておかねばならない。このホームでは起きそうにはないが、職員と利用者間で“子供扱い”の言葉、利用者の部屋間違ひ、利用者同士での嫌悪、浴室やトイレでの言葉かけ等で起こり得る言葉や態度が瞬時に起こる可能性が高い。これは双方の信頼関係が一番大切であるが、認知症の人だけにいつ起きるか分からないので、短時間で解決する事が必要であろう。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ピック病の特性上、思いや希望を十分表現する事が出来ない入居者の思いをいかに叶えていけるか、スタッフ、家族の協力のもと、総合的に取り組んでいる。2階では、日常生活の中で入居者の方がやりたいことなどを聞きながら、希望がかなえられるよう支援している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれの生活パターンを把握し、気持ち良く過ごせる事を第一としている。その日の状況および本人さんの状態に応じて柔軟に対応できる様取り組んでいる。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪型や髭剃りなどの整容、その方に合った衣類など、入居者一人ひとりが个性的で、お洒落な装いが出来るように、家族の方の協力を得て支援している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理中の様子を五感で感じていただけるよう、リビングでの過ごし方を工夫している。ピック病の特性上、準備や後片付けを一緒に行うことは難しいが、食事中は、互いの顔が見られる空間で、スタッフも一緒に楽しく快適に食事が出来るように取り組んでいる。2階では、日常的に準備・後片付けを手伝っていただき、食事の時間を楽しんでいただけるよう心掛けている。	調理は専門に従事しているパートの職員が行っている。訪問時は鶏肉の唐揚げ、野菜の盛り合わせと味噌汁、ご飯という普通の献立で全員が食べていた。それぞれの状態に応じて、3つのテーブルにつき、職員が付き添って介護をしながら皆美味しそうに食べていた。	週3日昼食を作りパートの職員が来て調理してくれるが、他の日は、当日勤務の職員が作る聞いた。1・2階ではメニューが異なり、それぞれ職員が献立を考えている。皆さん食欲もあり、自力摂取の人が殆どで、テーブル拭き等出来る事は手伝ってくれる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者一人ひとりの方に応じた水分量を守り、一日の間でしっかりと補給できる様に取り組んでいる。スタッフに調理師と栄養士がいるので助言をもらいながら、個々に応じた食事形態や提供の仕方を工夫している。また、食思の変化を見逃さないよう、すぐ記録に残して対応している。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝と寝る前を中心に、入居者一人一人に応じた口腔ケアを行っている。現在2名の入居者が訪問歯科による口腔ケアを定期的に行っており、歯科医による専門的なアドバイスも受けやすくなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況		次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェック表に記入することで、入居者一人ひとりの排泄パターンを、スタッフ全員で把握している。また、トイレ誘導時に便座に座る習慣をつけることで、トイレで自然な排泄ができるよう取り組んでいる。	トイレ・洗面は個室で行うことが出来る。トイレに誘導して便座に座るよう習慣づけている。病院から退院した人はおむつで帰ってくるので、布パンツで過ごせるように努力している。	布パンツで自立の人も半数近くおり、紙パンツで入所した人も今は布パンツで過ごしている。車椅子の人は職員がトイレに付き添うが、自分で行く人も多い。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い野菜やヨーグルト、プルーンジュースを摂取していただき、スムーズな排便を心掛けている。また、入居者一人ひとりに応じた適度な運動や必要最低限の下剤の服用で便秘解消の取り組みを行っている。	/		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入居者一人ひとりに応じてゆっくりと寛いで入浴できる事を目指し、時間に余裕を持った支援をしている。入浴時も歌を歌ったり、声掛けをして発語を引き出すといった関わりを大切にしている。	利用者の気が向いた時にタイミングを見計らって週2回入浴してもらっている。	週2日、1日3人ずつ入浴している。自立の人が5人。車椅子で二人介助の人もいるが、全員浴槽に入れる。拒否のある場合は、時間や人を変えて対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	動き始めると動きつばなしの方には、適宜休めるよう関わり、自発的に動かない方には、適宜運動できるように関わり、適度な昼寝の時間を設けることで生活のリズムを整えて、夜間の安眠および休息を支援している。2階では、人それぞれ生活パターンが違うのでそれに合わせている。特に夕食後から就寝までは自由に過ごしてもらうことで、入眠しやすい環境を整えている。	/		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	スタッフの方で薬の管理、使用を徹底している。関係機関と連携を図り、症状の変化によって減薬、処方薬の見直し等をみんなで考え、主治医および看護師、薬剤師に相談している。	/		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外出やドライブが好きな方と一緒に出かけたり、お花の好きな方と一緒に花壇にお花を植えたり、花瓶に生けたり、歌の好きな方と一緒に歌を歌う等、それぞれの方と楽しみに合わせたケアに取り組んでいる。それに加え2階では、食事の準備・後片付け、洗濯物たたみなどの家事を手伝っていただいている。	/		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者一人ひとりに応じて散歩、車椅子での外出、買物、外食など本人および家族と出来る事を考え、取り組めるように支援している。また、面会時など家族の協力を得て、ドライブや散歩などの外出支援を行っている。今年度は5月に、1階男性入居者の故郷である奈良に、ご家族様の協力を得て、日帰りで帰省されています。	ピック病の人はホーム内を歩く人が多く、散歩にも一人ずつ職員と一緒に歩く散歩していたが、今残っている人は今年度はもう歩く事なく、ソファに座って過ごしていた。1~2ヶ月に1回は外食に出かけるそうだ。	平均要介護度1.33と軽度で元気な人が多く、ドライブ等、月に1~2回は出かけており、外食は全員で行くそうだ。本人の希望があれば自宅へ帰ったり、買い物に行く等の個別外出支援もしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者のお金の使用については、基本スタッフで管理させてもらっている。外出時には、入居者の方の希望に応じて、買いたいものを買っていただいている。また、使用した分は出納帳に記入し、約一ヶ月分のコピーを家族へ送る等して管理している。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への手紙を一緒に書いたり、返事の手紙を一緒に見たり、家族の方からかかってきた電話を本人にも出してもらう。こちらから電話をかけたり、手紙を書いたりして、家族や大切な人とのつながりを支援している。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ピック病の方はよく歩かれるという特徴があるので、廊下や居間など障害物を出来るだけなくし、移動や歩きやすい空間を確保している。2階では、過ごしやすいようテーブルやいすを配置し、壁に季節感のあるものを飾っている。また、観葉植物などをさりげなく配置して、生活に安心感を与えられるよう配慮している。	新しいユニットに生まれ変わるに際して、内装をリニューアルして明るく落ち着いた環境になった。併せて家具を新調して入荷するそう。新しい利用者が入所する際にテレビを設置された。このリビングルームで利用者が楽しくのびのびと生活することを期待したい。	ユニットが新しくスタートして丸1年、9人が仲良く活気あふれて、これぞグループホームという姿を見せてもらった。今日はレクリエーションで、手のひらで大きなボールを投げて、カーリングのようなゲームを9人揃って楽しんでいる様子で、皆で同じ楽しみが出来、ベランダに出て周辺の景色を楽しめるようになってきている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間には周りの雰囲気合わせたテーブル、椅子を配置し、ほぼ決まった席に馴染みの方々と一緒に過ごせるように工夫している。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具は、入居者の方の状況に合わせて配置を変えている。昔から使っていた物、写真、音楽等、本人や家族の方々が落ち着いて過ごせる環境に取り組んでいる。各居室にトイレが備わり、ゆったりと排泄できる環境を提供している。			ピック病の人が生活する場だったので、個室も歩き回るコースにもなっていたので、安全第一になっていた。このホームは外国から輸入しているので個室面積は広い設計になっていて、トイレ・洗面所も完備している。個人の生活の場としての使い方も考えていくことになるのだろうと思う。

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	可能な限り歩けるよう介助する為、人がすれ違えるほどの廊下の広さを確保している。長時間同じ姿勢にならない為に違う硬さの椅子を用意し、椅子を変える等して離床の時間を長くしている。2階では、部屋やトイレが分からなくなる入居者の方のために表札を付けたり、歩行が不安定な方には手すりを付けたり、家具の配置を工夫したりといった取り組みを行っている。			